2012（平成24）年
12月1日
第139号
毎月発行
毎月第４月曜日は休館日です

西東京市
公民館だより

編　集
公民館だより編集室
発　行
西東京市公民館

柳沢公民館　柳沢1-15-1　☎042・464・8211　kouminkan@city.nishitokyo.lg.jp
田無公民館　南町5-6-11　☎042・461・1170　tana-kou@city.nishitokyo.lg.jp
芝久保公民館　芝久保町5-4-48　☎042・461・9825　shiba-kou@city.nishitokyo.lg.jp
谷戸公民館　谷戸町1-17-2　☎042・421・3855　yato-kou@city.nishitokyo.lg.jp
ひばりが丘公民館　ひばりが丘2-3-4　☎042・424・3011　hibari-kou@city.nishitokyo.lg.jp
保谷駅前公民館　東町3-14-30　☎042・421・1125　ekimae-kou@city.nishitokyo.lg.jp

大河ドラマ『平清盛』と現代日本

助川　幸逸郎（横浜市立大学ほか講師・日本文学専攻）

今年も残りわずかとなりました。世の中の多くの課題を意識せざるをえない一年でした。私たちは生き方の指針をどこに求めたらいいのでしょうか。

「21世紀の生き方を源氏物語に学ぶ会」や市民企画事業の講師として、受講者のみなさんに大好評の助川幸逸郎さんに原稿を寄せていただきました。

※低視聴率とカルトな人気

ＮＨＫの大河ドラマ、『平清盛』がメディアを賑わせています。

評判がよいからではありません。大河ドラマ四十年の歴史の中で、前例のない低視聴率が話題になっているのです。

そのいっぽうで、私のまわりには、このドラマの熱狂的なファンが何人もいます。その人たちは、「近年の大河ドラマの中で、こんなに夢中になって見ている作品は記憶にない」と口を揃えます。

『平清盛』が、こうした特殊な受けとめられ方をしているのは、どういう理由からなのでしょうか？

※清盛の時代と現代日本

『平清盛』に描かれた平安時代末期と現代には、多くの共通点があります。

清盛が生きた時代は、世界的に気候が寒冷化していました。その影響で、農産物の収穫が減少し、地球規模の飢餓が起こりました。また、この頃の京都では、地震や竜巻といった自然災害が、立て続けに起こったことも知られています。

二〇〇八年に起きたサブプライムローンの破綻をきっかけに、ＥＵをはじめとする様々な地域で経済が混乱に陥っています。そうした中で、東日本大震災の被害を受けた現代の日本人は、清盛の頃の都びとと、よく似た境遇にあるといえます。

平安時代末期の政治システムは、災害や飢饉をきっかけとする混乱に、対処する力を失っていました。その行きづまりを、強大な権力を揮って打ち破ろうとしたのが清盛です。武力と、宋銭を流通させることで得た財力を背景に、清盛は新しい政治を目指しました。

現代の日本も、戦後を支えてきた政治・経済のシステムでは、問題を解決できなくなっています。『平清盛』の中で、しばしば清盛は、「わしの国づくり」・「前例のないことだからやる」というせりふを口にします。ドラマの作り手が、二十一世紀の今だから求められるリーダー像を、清盛に重ねているのはあきらかです。

話題は古典文学からアニメまで

※挫折した「清盛革命」

清盛が目指した「革命」は、道半ばにして挫折しました。

平家が力を伸ばしたため地位や権益を奪われた人々が、やがて各地で反乱を始めます。こうした「抵抗勢力」に、旗頭として担がれていたのが源頼朝です。清盛は鎮圧に乗り出しますが、戦いながばで急死してしまいます。

平家がその後、あっけなく滅びてしまったのは知られている通りです。清盛の跡を継いだ宗盛が失策を犯したことにくわえ、宋銭が定着し切る前に決戦を迎えたことが、敗北につながったといわれています。壇ノ浦で平家が滅びた頃、宋銭の信用はまだ不安定でした。極度の飢饉の折などには、食料と交換してもらえない場合もありました。このため、財産の多くを宋銭の形で持っていた平家は、兵糧の確保に困っていたらしいのです。

頼朝は、平家を倒してからも、清盛のような強いリーダーシップを発揮しませんでした。社会制度や経済に対する姿勢も、清盛よりずっと保守的でした。頼朝を支えていたのは、「清盛革命」に反対する勢力だったのですからそれも当然です。結果として、武士と朝廷との関係や、武士勢力内部の序列など、様々な問題が未解決なまま放置され、平家滅亡後も血なまぐさい抗争は続きました。

※「戦後」へのノスタルジー

『平清盛』とは対照的に、朝の連続テレビ小説『梅ちゃん先生』は、高い視聴率をマークしました。こちらは、戦後復興期の日本を、主な舞台とする作品です。

しばらく前に、昭和三十年代を郷愁に充ちたタッチで描いた『ＡＬＷＡＹＳ 三丁目の夕日』という映画がヒットしました。『梅ちゃん先生』の人気も、右肩上がりに経済が成長していた時代を、懐かしむ思いに支えられていたと考えられます。逆に『平清盛』は、戦後日本の限界を暴くような物語だからこそ、視聴者の多くに拒絶されたのではないでしょうか。

そういえば、私のまわりの『平清盛』ファンに、戦後の日本人の典型的タイプ――男性サラリーマンと専業主婦――はいません。戦後社会を「自分の本来の居場所」と感じている人は、やはりこのドラマを見ると不快になるようです。

鎌倉の砂浜を掘ると、ときどき人骨が現れるという話を聴いたことがあります。平家滅亡後、東国武士たちがくり返した抗争の犠牲者が、いまだに鎌倉の海辺に埋まっているのだそうです。強引すぎる「清盛革命」に反発し、穏やかな変化を求めた結果、かえってたくさんの屍が生まれたのです。

過去を懐かしむ気持が、どういうドラマを見るかの選択を左右しているだけなら問題はありません。しかしそれが、社会の変革を阻む力となるとすれば、思わぬ害を生むことになります。現代日本で、「清盛革命」挫折後の悲劇が反復されないことを、私は願ってやみません。

わが街をもっと知りたくて

矢ヶ崎耕一さんとくるみ学級

畑を通して触れあう

西東京市向台町の矢ヶ崎耕一さんは、13年前に家業の農業を継ぎ、10年ほど前から、教育委員会より学童農園を頼まれ、近隣の小学校を受け入れています。子どもたちはそこでの農作業を通し、自分で収穫した野菜を味わう喜びを感じています。

そんな矢ヶ崎さんと、柳沢公民館で活動する知的障害者青年学級「くるみ学級」との交流は、平成20年から、学童農園担当の市職員の口コミで始まりました。「学級生にも農業体験をさせたい」という公民館の思いを矢ヶ崎さんが受け入れ、今年は春の大根の種まきから始まり、秋にはサツマイモの収穫まで、矢ヶ崎さんの指導のもと、年４回農作業の体験をしています。

11月、矢ヶ崎さんが丹精をこめて手入れをした畑で、学級生が自分たちの手で、サツマイモを収穫しました。秋晴れのもと、丸々と肥えたサツマイモを抱えたり両手にぶら下げたりし、「大きいイモが獲れたよー」と目を丸くして歓声をあげる学級生たち。みんなの顔は、自分で収穫できた喜びに満ち溢れていました。

収穫されたサツマイモは、スタッフとともにどんな料理にするか決め、みんなで調理をし、農業体験の楽しさを話題にしながら、おいしくいただきました。

学級生の農業体験について、矢ヶ崎さんは次のように語ります。

「土と親しむ体験は人を開放的にします。畑で大の字になって寝てしまった学級生もいました。普段あまり人と会話をしないある学級生は、畑作業のあと、積極的に自分を表現できるようになったそうです。畑の作業では、人とコミュニケーションがとれるからかもしれません。障がい者が農作業を通して多くを学んでいるということを、地域の人にも知ってほしいと思います」

矢ヶ崎耕一さん

川柳作りが趣味の矢ヶ崎さん。学級生との交流について次のように詠みました。

さつまいも
あたまをだして　皆（くるみ）を待つ

くるみ学級について

柳沢公民館で毎月2回活動する知的障害者青年学級。創作、音楽、交流などの活動を通して、社会性を身につけることを目的としています。

大きなサツマイモが獲れたよー！